奈良県立大学「研究季報」第12巻 第3・4号（2002年2月8日）

北海道の河川流域におけるレクリエーション地

小松原　　尚

1．はじめに
2．北海道における内陸地域の開発
3．河川流域のレクリエーション利用
4．豊平川流域におけるレクリエーション地
5．まとめ

1．はじめに

わが国にあっては、大陸の大河川に比べて流域面積に対する平野の割合が大きいという自然条件を有している。しかも平野は大小を別にすれば全国に分布している[1]。こうした自然条件から、歴史的にも河川下流部の沖積平野は物資の集散地となり、都市が形成されてきた。

これまでのわが国の地域開発の中心は沿岸域であった。戦後の高度経済成長期にあっては海面干拓による農地の造成や海面埋立による工業用地造成が活発に行なわれた。そして構造調整期になると、装置産業の業態転換に伴う用地の縮小と未利用造成地の拡大、海運システムの変化にともなう港湾地域の荒廃が進んだ。この結果生じた遊休地の再開発が太平洋ベルト地帯、中でも京浜・京葉や阪神、北九州といった旧来からの工業地帯を中心にウォーターフロント開発として進められた。

先に述べたような河川と都市との関わりは、海岸線と河川流域との境界である沖積平野のみならず内陸部にとっても重要である。なぜならば、この間に内陸部へは、軽薄短小型産業の立地や丘陵地帯でのニュータウン造成の進行をみ、生活用水や工業用水の需要の増加で、水資源としての陸水（河川・湖沼の水）への関心も高まったからである。

さらに、余暇時間の増加と安近短の観光需要に伴い、身近なレクリエーション地が求められている。河川流域、すなわち流路、河川敷、堤防、後背湿地を含む地域は都市にあっては身近な憩いの空間を提供する場でもある。河川や湖沼など内水面が上水供給というライフラインの一つを構成しているのみならず、生活に潤いをもたせる貴重なレクリエーションの場をも提供している。

本州の中央部には西から奈良県をはじめとして海岸線をもたない内陸県が存在する。本州のみならず市町村レベルまで拡げると、海岸線をもたない内陸の地域は日本列島に極めて多い。わが国の国土面積の2割を占める北海道にあっても、札幌市を含めて、海岸線をもたない市町村数は120市町村で、全道212市町村の55.3%にあたり、人口比では65.3%にあたる。

本稿では北海道をとりあげて、表記テーマへの接近を試みるが、その理由は単に上記の点だけにとどまらない。戦後北海道にあっては開発のための独自の政府機関が設置され、過大とも思われるような積極的な財政支出による公共投資が行なわれてきた。ダム建設や河川改修もこうした公共工事の一環として行なわれてきた。こうした投資によって産業基盤を整備し、その発展によって税収の増加などにより資本回収を企図したものである。しかし、そうした見通しとは裏腹に農業も製造業も大きな伸長をみず、このまま巨額の未収金を生みだすことになりかねないのである。

しかも限られた範囲だけでの利用からの収益による資本回収は困難であり、財政難に悩む当該自治体を一段と圧迫する要因にもなる。この悪循環を断ち切るためにも、クローズアップされたのが都市からのレクリエーション需要を取込み河川流域の利用を広げようとする試みなのである。

この脈絡の中でも北海道は典型事例の一つと考えられる。そこで本稿では、以上のような状況を踏まえて、広大な内陸地域を有する北海道の開発と河川流域のレクリエーション利用について検討してみようと考える。

2．北海道における内陸地域の開発

敗戦により海外植民地を失ったわが国にとって北海道は「日本再生のポープ」であった。これまでは樺太や千島への通過点に過ぎなかったこの地が食糧基地、地下資源の宝庫として脚光を浴びるようになったのである。道内の河川流域の開発も北海道庁、北海道開発庁それぞれの行政機関によって活発に進められた[(2)]。

広大な面積を有する北海道にあっても比較的開発の容易な地域はすでに農用地などへの利用に供されており、戦後のものは、内陸部の広範囲かつこれまで開発の困難視されていた地域に技術と資本が投入された。

第１図は石狩川流域の開発の進展を示したものである。石狩平野はこの石狩川の流域に形成された沖積平野である。石狩川本流をはじめとして、大小の支流がこの平野の氾濫原を形成している。火山性の湖である支笏湖を別にすれば、1910（明治43）年以降、石狩川中下流域の氾濫原の湖沼が農地へと改変されていったことがわかる。中でも中流域に広範囲に横たわっていた篠津原野の開拓は戦後の大規模事業の一つとして特記できる。食糧、なかんずく米増産政策の一環として進められ、国営事業を主軸に大規模な土地改良事業とダム建設による水利確保を並行して行なった（宮川・田邊, 1968, pp.147)。

このように北海道における開発は河川流域の農地開発でもあった。道内にはこの石狩川をはじめとして長大河川が３本あり、いずれも流域面積において全国の河川の十指に入る。それらの中で十勝川流域は畑作地帯となり、天塩川の上流域の盆地は水田地帯となっている。

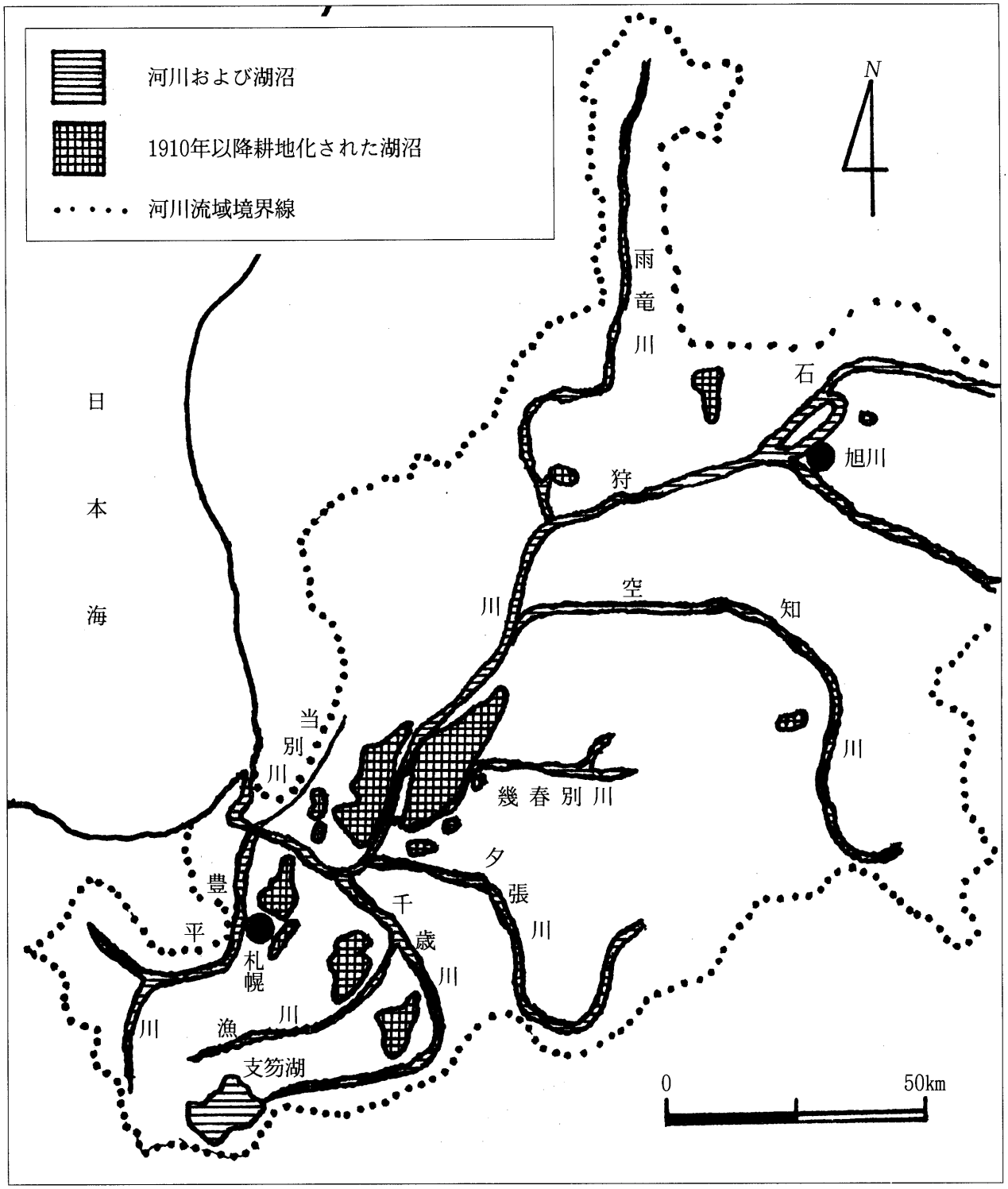
しかし、1970年代に入るとコメ過剰への対応として水田転作、作付制限が実施されるようになった。畑作地帯にあっても牛乳の生産調整、農産物の自由化など農業をとりまく情勢に一層の厳しさが生じ、これまで河川流域の恵みを享受したきた農村地域にあっても開発のあり方に再考が求められるようになってきた。

必ずしも需要を見通したとは言い難いようなダム建設、河川改修は1990年代以降のわが国にあって大きな財政圧迫要因となっている。さらに、地球環境問題の深化にともない自然保護の側面からも河川流域の開発と利用に関してその意義に疑問を呈する声が大きくなった。こうした状況は北海道にあっても例外ではなく、その計画見直しと施工を終えた施設・設備の利用促進に向けて新たな戦略の構築を迫られたのである。

モータリゼーションの進展により、都市のレクリエーション圏は飛躍的に拡大し、山中のダムサイトまでも日帰り観光が可能となった。さらに、都市化の進展によって無機的な環境が大きく支配するようになればなるほど、その反作用として仮に疑似的なものであっても自然への回帰願望が膨らむ。この脈絡の中から生まれてきたものの一つが河川流域のレクリエーション利用である。

北海道にあってもその例外ではなく、むしろ典型事例の一つとして位置づけることができよう。そこで次節では、道内における河川流域のレクリエーション地について、内陸部に焦点をあてて、分布論的に考察を試みる。

第１図　石狩川流域の開発



（石狩川開発建設部資料より作成）

3．河川流域のレクリエーション利用

かつてＮＨＫが実施したアンケートの集約結果を利用して北海道の内陸部を構成する市町村の観光資源の中から河川流域に関係するものを抽出することにした。

依拠した資料である「ＮＨＫふるさとデータブック」はその「利用の手引き」によれば「内容および文章表記は各市町村から提供されたデータを基礎資料として利用するとともに添付された諸資料（要覧・物産観光資料等）を参考に……随時聞き取り調査を行い、ＮＨＫ独自資料を加えるなどして総合的に取りまとめた（ＮＨＫ情報ネットワーク，1992)」ものであるので、上記の課題に接近するための資料として適切なものの一つと考えられる。

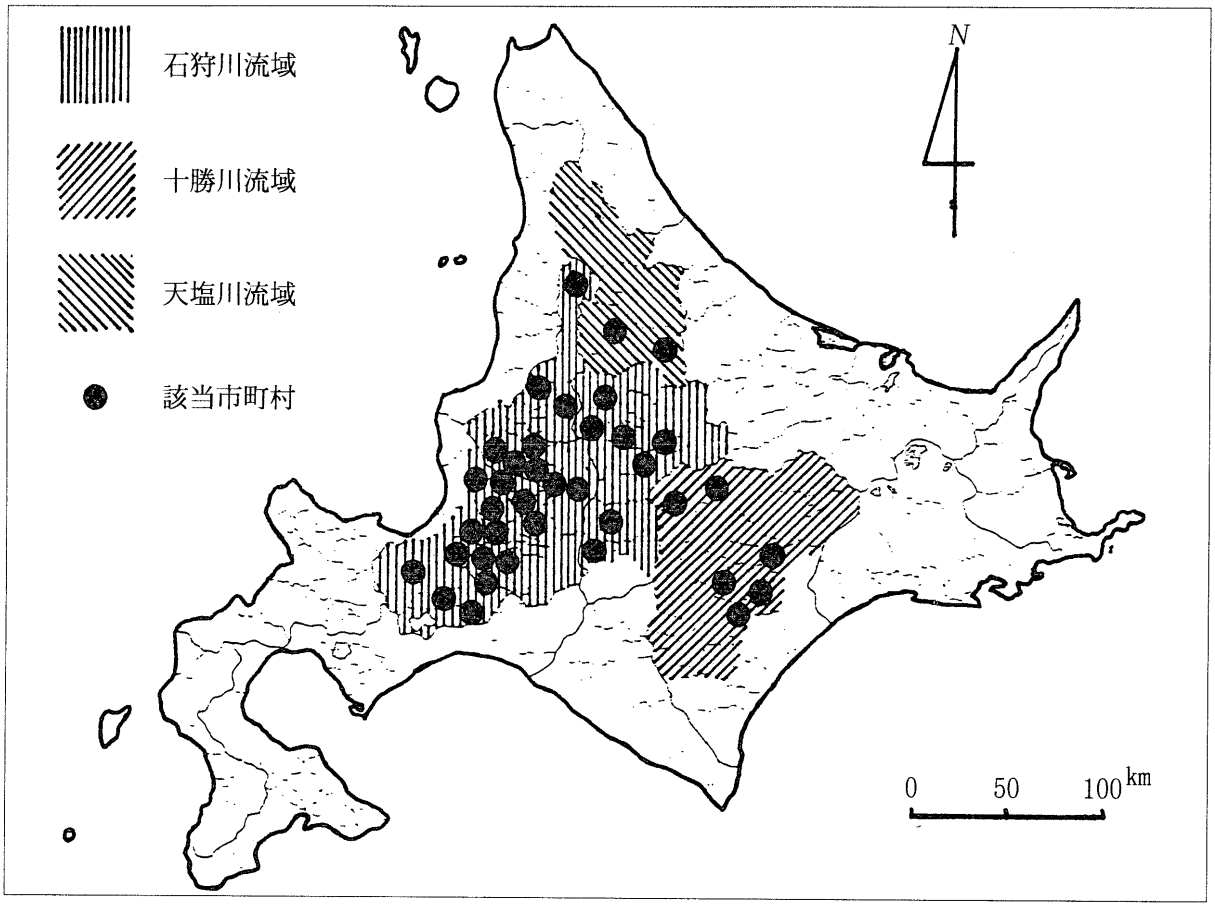
上記資料に掲載された「自慢の風景」「自慢の施設」「観光資源」「イベント」「四季の風物」「日本の百選など」等の項目にあげられた河川等にかかわる事項をそれぞれの市町村におけるリクリエーションスポットと考えた。

その中から、河川等に人為的な改変の加えられているところ、即ちダムと人造湖、河川護岸、橋梁を観光スポットやレクリエーションポイントとして挙げている市町村の中から、内陸部のもので、３大河川流域に限定して示したのが第２図である[3]。

まず気付くのは①　石狩川中流域の石狩平野中央部に展開する市町村に該当するものが多いことがわかる。次に②　北海道の脊梁山脈を構成する天塩、夕張、石狩の各山地に形成された谷奥に建設されたダムサイトが対象になっている。最後に、③　河川中下流域の長大橋梁や堰堤が挙げられる。例えば十勝川の中流域の町村がそれにあたる。④　３大河川の中では、天塩川流域に該等町村が少ないことも特徴である。

次節では、最も開発の活発に行なわれた石狩川流域の事例の一つとして札幌市を中心とした地域における河川のレクリエーション利用の状況について検討してみることにする。

第２図　三大河川流域内陸部におけるレクリエーション利用



4．豊平川流域のレクリエーション地

いわゆるリゾートブームに陰りの見え始めた時期にさしかかっていた1992年、「リゾート」のもつ本来の意味つまり、度々訪れる場所、身近なリクリエーションスポットを紹介するとともににその問題点を考えてみようということで、札幌市内の高校生にアンケート調査を実施した。アンケートへの協力をお願いした学校は男子のみの普通科高校、進学希望者から就職希望者まで混在する学級編成になっている。その中から１学級を選定し、ほぼ全員にあたる47名からアンケートへの回答を得た。

アンケートは設問項目に対して自由に記述してもらう形式で行なった。その一つに「君が気軽に行けるところで、たびたび訪れてみたいと思う身近な場所（公園、博物館、美術館、遊園地など）を一つ挙げよ」という設問があった。

この点について整理してみると札幌市内を流れる豊平川とその水系にかかわる場所をあげている生徒が47名中13名いることがわかった。手軽なリクリエーション空間として河川が位置づいていることを示していると考えられた。

一方、豊平川を含む石狩川流域を管理している北海道開発局石狩川開発建設部では、その頃「石狩川百景」を選定し取りまとめ、同名の出版物として1993年３月、北海道開発協会から発行した。この事業の目的はそれによると、第一に石狩川流域の素晴らしい自然、歴史、生活などを流域生活者と来道者にアピールし利用してもらうこと。第二に石狩川の役割の重要性の喚起にある。選定委員会は開発局関係者の他に写真家と観光関連業界から道観光協会、JTB、JAL、JR 北海道の代表から構成された。流域市町村から寄せられた多数の候補写真から前述の委員会は91ケ所を選んでいる。この中で札幌市では、石狩川・豊平川流域にある９ケ所が選定されている。

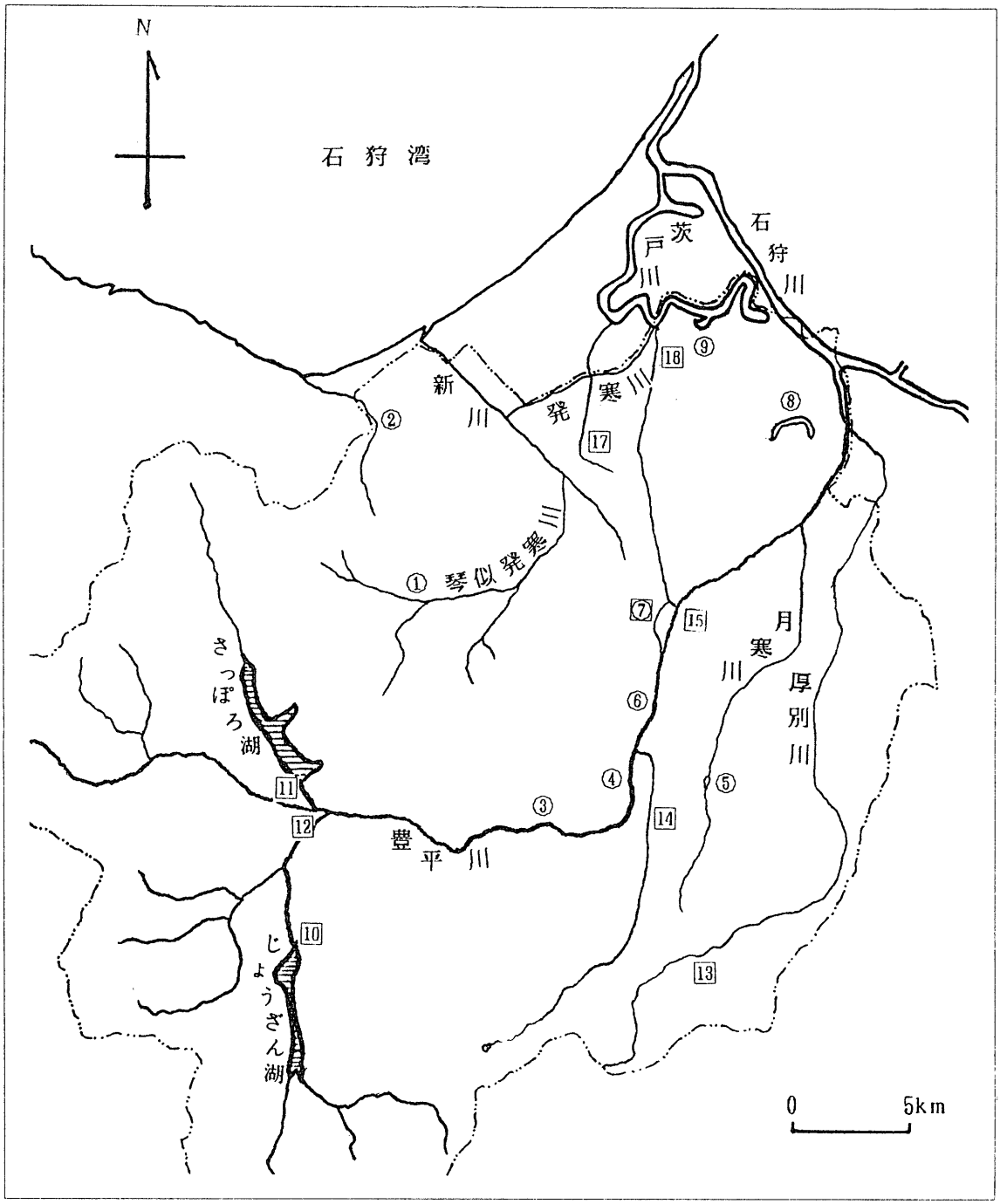
先般の高校生によるラインナップと開発局による選定地点とをそれぞれ地図上に示したものが第３図である。その特徴を示せば以下のようになる。

まず第１に、両者に共通して選ばれているのは中島公園（鴨々川）１カ所だけだということである。このことは豊平川流域に多数の様々な観光リクリエーション地の存在することを示している。北海道開発局石狩川開発建設部（1993, p.84）によれば中島公園はその名の通り、豊平川と鴨々川に挟まれた中州である。1908年より造園を開始し、1975年からは鴨々川沿いに水遊び場、ホタル水路、ニシキゴイの放流、シダレヤナギの並木などが整備されていった。また、「ボートに乗れ、噴水がある。……コンクリート広場やバラ園もあり草木も豊富である。中島児童会館の中では卓球やバドミントンなどのスポーツのできるし、マスコミでも紹介された人形劇場もある」という生徒による推薦理由にあるように市民にとって幅広くその価値が認められている場所である。

第２に、相対的に手付かずの状態の滝や渓谷美という観点からみると、生徒選定の平和の滝、星置の滝、開発局選定によるアシリベツの滝、真駒内川に関して両者の選定の共通性に気付く。いずれも市街地から路線バスで行けるところにありながら、自然の魅力を楽しめ、神秘的な雰囲気も味わえる場所である。

第３に、両者の選定意図の違いが伺える。即ち、生徒たちによる選定理由[4]をみてみると身近なリラックス空間、家族や友人とのレジャーの場、何か謎めいた遊びの場所として意識されている。一方、石狩川百景ではこの選定の目的からもわかるように水資源開発とその観光資源化および180万都市札幌における観光リクリエーション空間の整備の進展状況を一体的にアピールすることにウェートがおかれている。定山渓地域の２つのダムと地元の温泉観光地が選定されているのはそのような意図が現れと考えられる。さらに都市圏における親水機能の整備の事例として鴨々川、環境護岸、創成川、安春川を示してある。

第3図　札幌市内　石狩川・豊平川水系の観光レクリエーション地



① 平和の滝　② 星置の滝　③ 十五島公園　④ 藻南公園　⑤ 西岡水源池公園　⑥ ミュンヘン大橋
⑦ 中島公園・鴨々川　⑧ モエレ沼公園　⑨ ペケレット沼　⑩ 豊平峡ダム　⑪ 定山渓ダム
⑫ 定山渓温泉　⑬ アシリベツの滝　⑭ 真駒内川　⑮ 豊平川環境護岸　⑯ 創成川下流　⑰ 安春川
○ 高校生選定　□ 石狩川百景　　—··— 札幌市界

5．まとめ

土木技術の進歩の成果と経済成長期における豊富な財政資金を享受し、20世紀後半の北海道にあっても自然環境の資源化を積極的に行なった。石狩川をはじめとした河川流域の改修や源流部周辺へのダム建設水利事業の展開もそのような投資行動の一環として理解できる。そして、河川流域は現在まで、地域住民の生活にとって貴重な空間を提供してきたし、これからもその役割は一層高まっていくだろう。

しかし、最近の社会経済構造の変化にともない、そのような投資行動にも再考が求められるようになった。近年の自然保護への関心の高まりによって、開発から取り残された地域の自然環境の価値を積極的に評価し、日本のみならず世界に対してアピールしていこうとする活動が成果をあげつつある。

このような脈絡の中で行政側もAGS[5]の導入など、河川改修の手法にも工夫をこらすとともに、その内容を広く国民に印象づける活動を行なっている。「石狩川百景」の企画もそうした一環と考えられる。さらに、既設のダムサイトや改修河川敷への市民への関心を換気する目的に、それらの施設のレクリエーション利用へと誘導する事例も多い。利用促進のためのサービス供給側からの工夫の一つとして評価できるが、次世代を担う高校生たちへのアンケート調査の結果と行政の意図とにはその認識に格差が認められた。

さらに、これまで建設された河川にかかわる施設・設備の維持・管理にかかわるコストも国、地方自治体いずれにとっても負担となりつつある。今後、20世紀から引き継いだ資産を取捨選択し、再構成していく作業が進めらるにちがいない。そして、21世紀の地域創造[6]は上述のような編集作業を通じて、行政による供給の論理と市民の利用者としての感性の格差を均衡点に近づけるための、国や市町村そして団体などの既存の境界線を越えた合目的的な地域の結合関係の形成のことではないかと考えられる。

付記

本稿は奈良地理学会夏季例会（2001年7月21日、奈良教育大学）における講演内容の一部に加筆・補正を施したものである。

注

(1) 「日本の国土に占める平野の面積は約25％で、そのうちの約6割、国土全体の14％……を（低地）が占めるというのは、世界的にみれば非常に高率である。……流域面積2,863㎢の筑後川がつくる三角州の面積は約480㎢もあるのに比べ、流域面積23,654㎢の洛東江がつくる三角州の面積は約150㎢しかない」(杉谷・平井・松本, 1993, pp.72)。

(2) 梅棹（1960）によれば、北海道の変化の方向は「内地」に対する同質化の方向と「内地」からの異質化の方向の併存であり、異質化の方向は戦後強められたと指摘されている。その原因は北方の植民地を失ったことによる北海道の相対的位置の変化にあるが、その思想的潮流はケプロンや黒田、さらには札幌農学校関係者によって培われてきた「官僚理想主義」あるいは「北海道主義」であった。一方、現実には北海道主義者の考えるような主畜農業とは別に民衆レベルでは米作の拡大をみ、都市部では著しいミニ東京化が進行する。また、中央政府も統治制度の改革、多額の資本投資を通じて、同質化、統合化を進めていく。そして、北海道開発は中央からの統合主義と北海道主義との妥協の産物の性格をもっていると述べられている。

(3) 北海道における内陸部全体の動向については、小松原（1993）を参照されたい。

(4) 小松原（1995）のまとめによれば、「豊平川の上流の河原を利用し、…夏には家族連れなどでジンギスカンをしている光景も見られ、のびのびと遊ぶのにも最適」(十五島公園)、「のんびりとしていて、広くてゲームや焼肉など何でもできる」(藻南公園)、「自然が豊富にあるところという特徴がある。…まだ新しいこともあり、橋やベンチなどがとても立派である。そのベンチに座ってみるととても静かでのどかに感じました。私の家から自転車で20

～30分くらいである」(モエレ公園)、「四季を通じて楽しめる公園である。夏はジンギスカンパーティーや広々とした公園の中で遊べる。秋は樹木が美しく紅葉し良い景観である。冬から春にかけてはワカサギ釣を楽しめる。ボートで湖面に出てワカサギ釣を楽しむことができ、たくさん釣れる。川や海のよりも楽しい」(ペケレット沼)、「ここで寝転がって音楽を聞いていると気持ちが休まる」(ミュンヘン橋のたもと)、「夜には幽霊がでることでも有名」(西岡水源地公園)。

(5) Aqua Green Strategy (アクア・グリーン・ストラテジー) の略語。これまでの川の整備は災害の防止を最優先として行なわれ、高い堤防や、コンクリート護岸などがつくられてきた。その一方で、自然の川の流れや水辺の空間が変化し、そこに暮らす生物への影響も心配される。そこで、安全性の追求のみならず水辺の自然環境の保全・再生、自然との共生を考えようとする事業。北海道開発局 (当時) では、平成2年度からこの事業に取り組んでいる (http://www.is.hkd.mlit.go.jp/contens 06/frame06.html)。

(6) 「地域創造」を名称とする組織も出現している。例えば、財団法人地域創造は芸術文化の振興によって創造性豊かな地域づくりを実現することを目的に1994年に設立され、全国の地方公共団体や関連の公益法人が実施する芸術文化活動に対して財政的な支援を行なっている (http://www.jafra.nippon-net.ne.jp/)。また、奈良県立大学では、人づくりを通じて地域づくりを支援することをめざして、2001年度より地域創造学部を開設している (http://www.prf.nara.jp/npu/)。

文献

梅棹忠夫「北海道独立論」『中央公論』, 1960年(5).

ＮＨＫ情報ネットワーク『ＮＨＫふるさとデータブック１ [北海道]』日本放送出版協会, 1992.

小松原尚「北海道における『内陸水辺』の観光・リクリエーション的利用について」『北海道ウォーターフロント研究』第3号, 1993年.

小松原尚「札幌市内における豊平川水系の観光レクリエーション地」『水資源・環境研究』第8号, 1995年.

杉谷隆・平井幸弘・松本淳『風景の中の自然地理』古今書院, 1993年.

北海道開発局石狩川開発建設部『石狩川百景』北海道開発協会, 1993年.

宮川善造・田邊健一編『環境の科学としての地理学－第二増補版－』大明堂, 1968年.